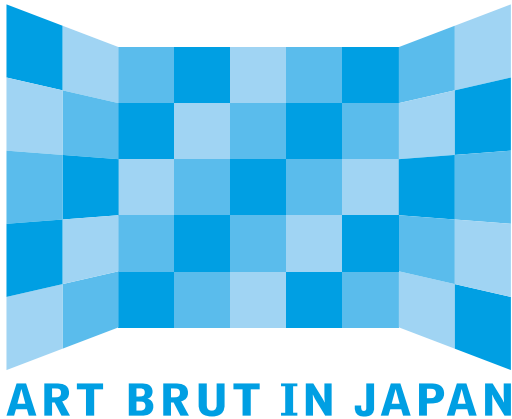


報道担当 各位



多様な主体との共働による
アール・ブリュット
魅力発信事業

NEWS LETTER (報道資料)

VOL.3 2014年2月27日(木) 発行

このニュースレターでは、本事業の最新リリースや、今後開催されるイベントの注目ポイントなどについてお知らせします。

本事業や各イベントの詳細につきましては、同日発表「全体概要 第4版」を参照ください
(下記 URL に PDF 形式で公開しております)。

アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA (設置者：社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団)

滋賀県

近江八幡市

一般社団法人 近江八幡観光物産協会

NPO法人 はれたりくもったり

アール・ブリュットネットワーク

滋賀県施設合同企画展実行委員会

本事業に関するお問合せ (広報窓口)

アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会事務局 (滋賀県社会福祉事業団 企画事業部)

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA

電話：0748-46-8100 (担当：川那辺、平日10:00~17:00) メール：kikaku@sisyazi.jp

この資料は、こちらの URL に「全体概要」とあわせて公開しています。 <http://www.no-ma.jp/filearchives.html>



「アール・ブリュット☆アート☆日本」特別展示作家 日比野克彦さんインタビュー

開館10周年を迎えるボーダレス・アートミュージアムNO-MAを拠点に、近江八幡の町屋など8会場にて開催される展覧会「アール・ブリュット☆アート☆日本」。本展の特別展示作家である日比野克彦さんにアール・ブリュットについての思い、地域に関わるアートプロジェクトついてのエピソードをお聞きしました。

※この記事は、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAが不定期に発行している広報誌「野間の間」の2014年2月27日発行号で掲載される記事を、転載しています。

※日比野克彦さんは、3月1日(土)に行われるオープニングレセプションに、ゲストとして参加される予定です。取材などのお問合せにつきまして、お気軽にご連絡ください。

日比野克彦さん アーティスト/東京藝術大学美術学部教授

- 1958年 岐阜県生まれ
- 1984年 東京藝術大学大学院卒業
- 1995年 ヴェネチア・ビエンナーレ 出展
- 2003年～ 越後妻有アートトリエンナーレ 大地の芸術祭「明後日新聞社文化事業部」
- 2007年 金沢21世紀美術館「ホーム→アンド←アウエー」方式
- 2008年 ボーダレス・アートミュージアムNO-MA企画展「飛行する記憶～記憶は創造を呼び起こす～」出展
- 2010年～ 瀬戸内国際芸術祭「海底探査船美術館プロジェクト 一昨日丸」
- 2012年 ぎふ清流国体・ぎふ清流大会 総合プロデューサー
- 2013年～ 六本木アートナイト アーティスティックディレクター
- 2013年 「Hibino on side off side 日比野克彦」展(川崎市岡本太郎美術館)

【主な役職】

- 2013年 平成25年度 文化庁・厚労省共催 障害者の芸術活動への支援を推進するための懇談会委員
- その他 日本サッカー協会理事
福島芸術計画×ASTT2012フラッグシップ・アーティスト



日比野克彦さん
© Mitsuru Goto

ーアール・ブリュットとののはじめての出会いはいつですか？

日比野克彦さん (以下、日比野) : スイス、ローザンヌでのアール・ブリュットコレクションでした。1980年代後半にパリ、ロンドンで展覧会活動をしている中で、ローザンヌにも立ち寄りました。ローザンヌの美術館をチェックしていた際、アール・ブリュットの美術館とも知らずに、ふらりと入ったのが最初の出会いです。美術館に入って、作品の異様な迫力を感じたことを今でも覚えています。その後、アール・ブリュットの言葉の意味を知りました。言葉を知る前に作品と出会っていたんです。

――アートの一番の魅力は何でしょうか。

日比野：アートの魅力はですね……。思いもかけないところで、時間空間を超越して共感できることかな。優秀であろうが、偉大な人であろうが、どんな人でも自分という存在は一人なわけです。だからみんな自分の存在を意識するために、自分以外の人に「自分がここにいるのか」と問いたいのだと思います。その為に、お互い言葉を交わしたりとか、時間を合わせたり空間を同じ位置に合わせたりして出会ったりするけれど、そんなことを介在させずに、自分以外の何かと共感できるのがアートの魅力なんだと思います。

――日比野さんのアートプロジェクトは「人」や「場所」との出会いが大切な軸となっているように思います。これまでのアートプロジェクトや旅などで、一番記憶に残っている出会いはありますか。その出会いは日比野さんの活動や創作にどのように繋がっていますか。

日比野：2003年から新潟県で「明後日朝顔プロジェクト」をやっています。山の中にある筋平（あざみひら）という集落を拠点に活動しているアートプロジェクトです。ここでは毎年、朝顔を集落の方々と東京などから来た学生たちと共同で育てています。

始まりは、村の廃校になった小学校で何か出来ないかという話から。そこで、筋平だからこそ出来ることをしようということになり、村の人と一緒に出来ることは何かと考えた時に出てきたアイデアが、農作業や土いじりとなって、花を育てる企画に繋がったんです。「夏の花といえば？」とおばあちゃんに聞いたところ「朝顔すけ！」と即答があり、朝顔を木造2階の校舎の屋根までロープを張って育て始めました。ロープを張る前は村の人に「そんな高くまで伸びないよ」と言われましたが、実際に張られたロープを見ると、みんな「あそこまでのびるといいね」という気持ちになりました。つまり、みんなが同じ風景を頭の中にイメージすることができるようになったんです。真夏には見事に屋根まで蔓は伸び、校舎は朝顔で覆われ、多くの人がこの村を訪れました。秋になり、芸術祭の企画は閉幕したんですが、朝顔はまだ花をつけていたので、秋までこのままにしておくことにしました。10月の末に再び筋平に来た時には、朝顔は枯れていました。ロープを屋根から外して種を穫ろうとしたんですが、それがものすごい量だったんです。種をみながら誰となく、そこに居た人たちが言いました。「また来年もやるうか」と……。そのとき私は思いました。「種が穫れたから来年もする、ということはこれは毎年繰り返されて、始まったら終わらないな……。あれから12年目。今年もまたやります。

――今回の展覧会は「多様な主体との共働」をテーマとしています。全国でアートプロジェクトが町づくりなどに取り入れられていますが、今後、「アール・ブリュット」が地域やコミュニティにとってどのような可能性を持つと思われますか。

日比野：アール・ブリュットという意味をもっと広げていくべきだと思います。美術の世界で生まれた言葉ではあるけれど、その美を感じる心をベースにして人間の心は成り立っており、その人間が社会を成立させているという意味でいえば、社会の価値観に影響を及ぼす思考としてのアール・ブリュットになってよいし、なるべきだと思います。

インタビューア：藁戸さゆみ（ボードレス・アートミュージアムNO-MA学芸員）

■ 毎週土曜日には、アール・ブリュットの「いま」と「これから」を語る 関連イベントが開催されます

本展覧会の関連イベントでは、日本や海外で活動されている方々をお招きし、美術館やまちづくり、海外など様々な視点から、アール・ブリュットの「いま」と「これから」を語っていただきます。

海外からのゲストは、2006年からボーダレス・アートミュージアムNO-MAとの連携プロジェクトに取り組み、2008年にコラボレーション展「JAPON」展が開催された、アール・ブリュット・コレクション（スイス・ローザンヌ市）のサラ・ロンバルディ館長や、2010年「アール・ブリュット・ジャポネ」展を開催したパリ市立アル・サン・ピエール美術館のマルティヌ・リュザルディ館長などが来日し、記念講演を行います。

アール・ブリュットの魅力が、作品だけでなくこれらのイベントからも伝わるものになると考えております。

◆ オープニングレセプション

講演Ⅰ 「NO-MAとの連携点をとおして～日本のアール・ブリュットの魅力を語る～」

サラ・ロンバルディ（アール・ブリュットコレクション館長）

講演Ⅱ 「日本のアール・ブリュット」

はたよしこ（NO-MAアート・ディレクター）

ゲスト：日比野克彦（アーティスト）

- ・ 開催日 : 2014年3月1日（土）13:00～15:30
- ・ 会場 : 酒游館（滋賀県近江八幡市仲屋町中21）
- ・ 定員 : 100名
- ・ 入場料 : 無料（要予約）

◆ 講演

講演Ⅰ 「ヨーロッパのアール・ブリュット」

ローラン・ダンシャン（学芸員/Raw Vision特別顧問）

講演Ⅱ 「新聞記者が見た＜NO-MA＞以後のアールブリュット」

岸桂子（毎日新聞学芸部記者）

- ・ 開催日 : 2014年3月8日（土）13:00～15:00
- ・ 会場 : 酒游館（滋賀県近江八幡市仲屋町中21）
- ・ 定員 : 100名
- ・ 入場料 : 無料（要予約）

◆ 講演 「新しい美術館のかたち～アール・ブリュット作品を美術館があつかうこと～」

講演Ⅰ マルティヌ・リュザルディ（パリ市立アル・サン・ピエール美術館館長）

講演Ⅱ 保坂健二郎（東京国立近代美術館 主任研究員）

ゲスト：黄榮村（台湾前文部大臣）、陳學聖（国会議員）、陳翠華（社団法人台湾心身障害芸術発展協会理事長）

ゲスト：嘉田由紀子（滋賀県知事）

- ・ 開催日 : 2014年3月15日（土）13:30～16:00
- ・ 会場 : 酒游館（滋賀県近江八幡市仲屋町中21）
- ・ 定員 : 100名
- ・ 入場料 : 無料（要予約）

※以上関連イベントのご予約は、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAにて承ります。

電話・FAX：0748-36-5018 ウェブサイト：<http://www.no-ma.jp/>



福祉や芸術だけでない、多様な視点から議論していく アール・ブリュット魅力発信の公開研究会、 これまでの議論と第3回（3月12日）開催のお知らせ

「多様な主体との共働による アール・ブリュット魅力発信事業」は、これまで滋賀県内の商業施設、また全国の福祉関係者が集まるフォーラムと、多様な主体との共働を通じて、さらに多くの人々にアール・ブリュットに出会っていただく機会創出に取り組んできました。

また同時に、アール・ブリュットのもつ魅力が福祉や美術だけでなく、医療、教育、観光、まちづくりなど、「様々な視点」から語られる機会を、多様な主体との共働によって創出していくことを、もう一つの狙いとしています。

いま「糸賀一雄生誕100年」という節目であり、福祉からみたアール・ブリュットの魅力が主に語られる傾向にありますが、それだけではないアール・ブリュットの可能性を、本事業を通じて見つめていくことができると考えています。

公開研究会ではこれまで、各展示会の内容をレビューしながら、美術・福祉をはじめ様々な分野の研究者によりアール・ブリュットの魅力やその発信手法のアイデアについて議論してきました。そして最終回となる第3回では、各委員が考えたアイデアを提案書の形式に落とし込み、より具体的な魅力発信のあり方について検討していきます。

この NEWS LETTER では、第2回の公開研究会で各委員から発表されたアイデアや意見についてまとめてみました。第3回で行われる議論の参考資料として、ご覧ください（各委員のコメントを引用・掲載される場合は、事前にご連絡ください）。



■ アサダワタル 委員（日常編集家）

発信手法のアイデアとしては3つ。まずはアール・ブリュットという言葉はそれとして、もっと「ボーダレス」な展示があってもよいのではないか。企画のテーマがはっきりとあって、それに対して障害の有無は関係なくアール・ブリュット作品もいわゆる一般の現代美術の作家作品も同列に並ぶことで新たな視点が提供されると思う。

次に福祉の現場で、たとえば支援者が聞き書きするとか、福祉の日常の現場で起こっていることを記録するようなこと。実際すでに支援する側が、むしろ逆に人生の先輩としての私見をもらうというような関係が新しい関係をつくっていくというようなことが行われていると聞いている。

最後に、展示を模写やスケッチをしてみても面白いのではないか。これはあまりに直球だが、「鑑賞」から「つくる」という行為につなげるような意識を生み出すための手法としては可能性があると思う。

アサダワタル氏 プロフィール：

1979年大阪府生まれ。音楽、文章、プロジェクト。2002年から音楽活動を始め、2003年以降は活動を”音”から”場／事”に拡張。様々なスペースの運営、地域コミュニティに関わる音楽ワークショップなどに従事。2013年、ドラムを担当するSjQ++にてアルスエレクトロニカ準グランプリ受賞。著書に『住み開き 家から始めるコミュニティ』（筑摩書房）、『アール・ブリュットアート 日本』（平凡社、編著）等。神戸女学院非常勤講師。「美の滋賀」アドバイザー。



■ 近藤隆二郎 委員 (滋賀県立大学 教授)

アール・ブリュットにおいては対話が非常に重要だと思う。展示という枠組みでもどうしても作品として見させられている感覚がある。これまで作品の展示方法についてその議論をしてきたが、もっと根本的に違う発想で作品との対峙を考えてもいいのではないかと。

それとは別で学校、つまり子どもたちがいる現場に、このアール・ブリュットの持っている力をどう着地させていくかを考えることは、実は将来に向けての発信という意味でも大事になってくる。特別学級や交流学級の先生とどういう風につながるか。たとえば障害を持った子だけじゃなくて、何か1つの生の力を出した作品を受け止めるコンクールがあるとよい。小学生たちが毎年夏休みにいろんな絵画コンクール出しているが、先生が指導してきれいにするのはない子どもたちの生の力を出し合うコンクールができることを初めてアール・ブリュットというものが身近に感じられると思う。

近藤隆二郎氏 プロフィール：

1965年東京都生まれ。大阪大学大学院工学研究科（環境工学専攻）、和歌山大学システム工学部を経て現職。専攻は環境社会システム。人間・社会・環境の結びつきを、文化やイメージを鍵としてシステム化し、市民参画デザインとして再構築することを目指して研究実践している。人間社会と環境との絡み合いに関心があり、写し巡礼地・インド都市巡礼・熊野古道・蛇伝説・エコビレッジなどについて調査研究と実践を進めてきたが、現在は五感と身体から感じるまちづくりや身体計画論を構想する。



■ 末安民生 委員 (日本精神科看護技術協会 会長)

私の関わっているところでも公開制作をアレンジしているが、1日に数センチしか描き進めない作家の方がいて、朝見に行っても夕方行ってもほとんど何も変わらないということがあった。しかし、それによってその人の世界や過ごしている時間の感覚が伝わって、見る人にも影響があるのではないかと。人という表現とか存在と向き合える可能性があるのではないかと。

末安民生氏 プロフィール：

1964年鹿児島県生まれ。都立松沢病院に13年間勤務後、衆議院議員政策秘書をつとめる。看護師として地域のメンタルヘルスに関わり、慶應義塾大学准教授を経て、現在は天理医療大学教授。渋谷区で、障がい者就労支援活動を行うNPO法人の理事長も担当。これまでの活動の過程で精神障害者の「表現」と出会い、アール・ブリュットに関心を寄せる。2013年に設立されたアール・ブリュットの振興を目的とした全国的なネットワークの副会長に就任し、その普及振興に取り組む。



■ 竹内厚 委員 (Re:S 編集者)

作品の中には展示のしづらさが理由で作品の選定からまれるものもあり、現場でつくられるものと展示されてるものとの間に少し差があると思う。作品として現われているもの以外のさらに先にあるものを見たいと思っていたので、その意味で「パフォーマンス」に可能性を感じている。

「すげえ」ものはアール・ブリュットに限らず世の中にたくさんあるが、それを受けて何かを生み出すことを誘発する力がある。それを表現する場はつくれるような気がしている。つくるということに限らず、今回の研究会でも何度か話題になった「作品に突っ込みを入れる」というようなことでもよい。アール・ブリュット作品はさすがに言葉をなくしてしまうところはあるが、突っ込みたい気持ちが誘発されているように思うので、そういう対話の場が用意されることがアール・ブリュットにはふさわしいと感じている。

竹内厚氏 プロフィール：

1975年、兵庫県生まれ、大阪育ち。京阪神一円のカルチャー情報誌『Lマガジン』休刊にともなって、2010年から「Re:Standard=あたらしい“ふつう”を提案する」をコンセプトに、さまざまな活動をつづける編集事務所『Re:S』へ。地元のカルチャーまわりを中心に編集&執筆。聖地探索ユニットfernich、京都造形芸術大学ULTRA FACTORYでのBYEDITディレクターなどの活動も行う。近年はアール・ブリュットにも関心を寄せ、関連原稿執筆も。



■ 鳥井新平 委員 (近江兄弟社小学校 教諭)

これから日本の文化と社会はどうなっていくのかということ考えたときにアール・ブリュットの持っている可能性というのは非常に大きいと思う。具体的には3つのアイデアを考えている。まず1つ目は、文章化。アール・ブリュットとはこうですみたいな宣言文を、子どもにもわかる言葉で短い文章で端的にまとめる。2つ目は、事例研究やラウンドテーブル。例えば商店街から、医療現場から、教育現場から、あるいはアートの世界から、いろんな現場からアール・ブリュットをめぐる事例が報告されて、それをめぐって対話の機会があればいい。3つ目は継続。続けていく上で絶えずそこに対話(ダイアログ)が仕掛けられている必要があり、それがなければ単なるブランドになってしまう。

鳥井新平氏 プロフィール:

1957年北海道生まれ、大阪育ち。アートと絵本をこよなく愛す小学校教員。近江ハイハイ絵本部屋、太子ホール・クリスマスライブ主宰。地域社会の中で生活の中から、表現活動を通して人を開けつないでいくことをライフワークとして考える。ボーダレスアートミュージアムNO-MAでは地域交流プログラムのアドバイザーの経験あり。また、バンド「ありらん食堂」のリーダーとして、メッセージ性のある歌の伴奏をつとめる。



■ 早川弘志 委員 (社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房 主任支援員)

作品制作の現場でもある私の福祉施設では、一緒にいるおもしろい人たちの作品を多くの方に見ていただきたいという理由から作品の展覧などを始めた。作品を展示することで彼らが豊かになり、その人と一緒に過ごす周りの人が豊かになり、これまでその人に関わることのなかった福祉の社会を全く知らない人たちがその人のことを知って、また豊かになるようにという目的で取り組んできた。本当にいろいろな場所で、全く無関心な人たちに作品を見ていただくということは重要なことだと思う。それを見てどう思うかというのは人それぞれだが、そこで見て感じてもらうことでより広がっていくと思っている。今後も多くの人に見ていただき、意見や批評をフィードバックしてさらに発信していきたい。

早川弘志氏 プロフィール:

1971年三重県生まれ。2000年よりやまなみ工房に支援員として勤務。2008年からアトリエころぼくくろの班の担当となり、絵画や陶芸を中心とした制作活動の支援、各種展覧会の企画や公募展の展覧、グッズ制作等、マネージメントを行う。様々な“表現”が人を繋ぐきっかけとなり人生がより豊かなものになるよう、誰もが共生できる社会づくりを目指し活動する。

※ 山口真有香委員(滋賀県立近代美術館 学芸員)は第2回公開研究会では欠席でしたので、ここではプロフィールのみ紹介させていただきます。

1977年京都府生まれ。関西学院大学大学院文学研究科(美学専攻)博士後期課程単位取得退学。これまでに企画した展示は「日本絵画 組み合わせの美」(2012年・滋賀県立近代美術館)「おでかけミュージアム・キャラバン 滋賀のアール・ブリュット」(2013年・県内3会場を巡回)など。専門分野は日本美術史。

■ 第3回公開研究会は3月12日(水)に開催いたします

そして第3回は、これまでの展覧会レビューや様々な主体による発信事例、また実際の制作現場の見学を踏まえて、より魅力的で効果的な発信手法を見いだすことを目的として議論を展開します。具体的には、第2回研究会でそれぞれの研究員から出た発信手法に関するアイデアについて、共働相手として想定できる主体や企画の内容についてさらにアイデアを出し合い、いくつかの企画案をまとめたいと考えています。作品展や公開制作、Webや情報誌による情報発信など、これまでの取り組みにとらわれない新たなアール・ブリュットの魅力発信企画にご期待ください。

※「公開研究会」の趣旨や詳細については、本日更新の「全体概要」第4版 24ページ以降を参照ください。

- ・ 開催日 : 2014年3月12日(水) 9:00~12:00
- ・ 会場 : アンドリュース記念館(滋賀県近江八幡市為心町中31)

■ 「アール・ブリュット☆アート☆日本」について

(本日更新の「全体概要」第4版 17ページ以降を参照ください)

揺るぎのない「私の中にしかない私だけの世界」を見る者に気付かせてくれるアール・ブリュットの作家たち。日常生活に密着したかたちで生まれるアール・ブリュットの作品。その魅力は、福祉、医療、美術といった分野の領域を超えて、今、大きな注目を集めています。今展では、開館10年目を迎えるボーダレス・アートミュージアムNO-MAを拠点に、近江八幡の町屋など8会場にて、35作家、約500点からなる日本のアール・ブリュットの祭典を開催いたします。

また台湾の作品も特別出展し、日本そして台湾のアール・ブリュットを発信します。

- ・ 会期 : 2014年3月1日(土)~3月23日(日) (月曜日休館) の20日間、10:00~17:00
- ・ 会場 : 近江八幡市重要伝統的建造物群保存地区の下記8施設
 - ・ ボーダレス・アートミュージアムNO-MA (滋賀県近江八幡市永原町上16 [旧野間邸])
 - ・ 奥村邸 (滋賀県近江八幡市永原町上8)
 - ・ まちや倶楽部 (滋賀県近江八幡市仲屋町中21)
 - ・ 旧吉田邸 (滋賀県近江八幡市多賀町758)
 - ・ カネ吉別邸 (滋賀県近江八幡市為心町元)
 - ・ かわらミュージアム (滋賀県近江八幡市多賀町738-2)
 - ・ 映像コーナー: 尾賀商店 (滋賀県近江八幡市永原町中12) ※ 無料
 - ・ ライブラリ・インフォメーション: 旧八幡郵便局 (滋賀県近江八幡市仲屋町中8) ※ 無料
- ・ 出展者 : 35作家
- ・ 作品数 : 約500点
- ・ アーティスティック・アドバイザー: 保坂 健二郎 (東京国立近代美術館 主任研究員)
- ・ 入館料 : 本展覧会では、8会場すべて観覧いただける全館共通パスポートをご用意しました。

全館共通パスポート 前売券 700円

発売期間 1月15日(水)~2月28日(金)

- 取り扱い場所
- ・ ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
 - ・ チケットぴあ電話予約 0570-02-9999 Pコード766-031
 - ・ チケットぴあインターネット <http://pia.jp/t/> (※PC・携帯電話共通)
 - ・ 店頭販売はチケットぴあ店舗/セブン-イレブン/サークルKサンクス

全館共通パスポート 当日券 1,000円

発売期間 3月1日(土)~3月23日(日)

- 取り扱い場所
- ・ ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
 - ・ チケットぴあ
 - ・ 旧八幡郵便局
 - ・ 一般社団法人 近江八幡観光物産協会 (白雲館)
 - ・ かわらミュージアム

一館チケット (当日のみ販売) 300円

発売期間 3月1日(土)~3月23日(日)

- 取り扱い場所
- ・ ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
 - ・ 旧八幡郵便局
 - ・ 一般社団法人 近江八幡観光物産協会 (白雲館)
 - ・ かわらミュージアム

※かわらミュージアムを一館のみでご覧になる場合は、「一館チケット」+「かわらミュージアム常設展チケット (300円)」をご購入ください。

- ・ 主催 : アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会
- ・ 後援 : 滋賀県教育委員会、近江八幡市教育委員会

- ・ 協力 : 近江八幡まちや倶楽部、尾賀商店、株式会社まっせ、株式会社カネ吉ヤマモトフーズ、株式会社ケレスたなか、滋賀県立大学人間文化学部生活デザイン学科佐々木一泰研究室、酒游館、同志社大学政策学部大学院総合政策科学研究科井口研究室、NPO法人ヴォーリス建築保存再生運動一粒の会、まちづくり近江八幡 (かわらミュージアム指定管理者)、Collection de l'Art Brut、Halle Saint Pierre、Raw Vision、NPO法人しみんふくし滋賀、八幡酒蔵工房、NPO法人工房あかね、滋賀県立精神医療センター、(社福)大木会 もみじ・あざみ、(社福)かんな会 かなの里、(社福)恵庭光風会 多機能型事業所 光と風の里 恵み野西、(社福)湖北会 湖北まこも、(社福)しがらき会 信楽青年寮、(社福)にじの会 「にじアート」、(社福)みぬま福祉会 川口太陽の家 工房集、すずかけ絵画クラブ、(社福)やまなみ会 やまなみ工房、(社福)光林会るんびにい美術館、(社福)若竹福祉会、(社福)つむぎ多機能型事務所 くわの実 (順不同)
- ・ 特別協力 : 株式会社HIBINOSPECIAL、台北市立大学・視覚藝術研究所 蘇 振明教授、台湾身心障礙藝術發展協會-光之藝廊 Arts Development of Taiwan with Disabilities- Luminance Art Space